# 續本月甲鄙物語 貳

13
3154
2

特
へ13
3154
2

か行ハ所
麻布
三河町
三井家
日本橋

曽我物語

さのみこそ浅間なふ〜あらけなるまさごはらへ給へ神

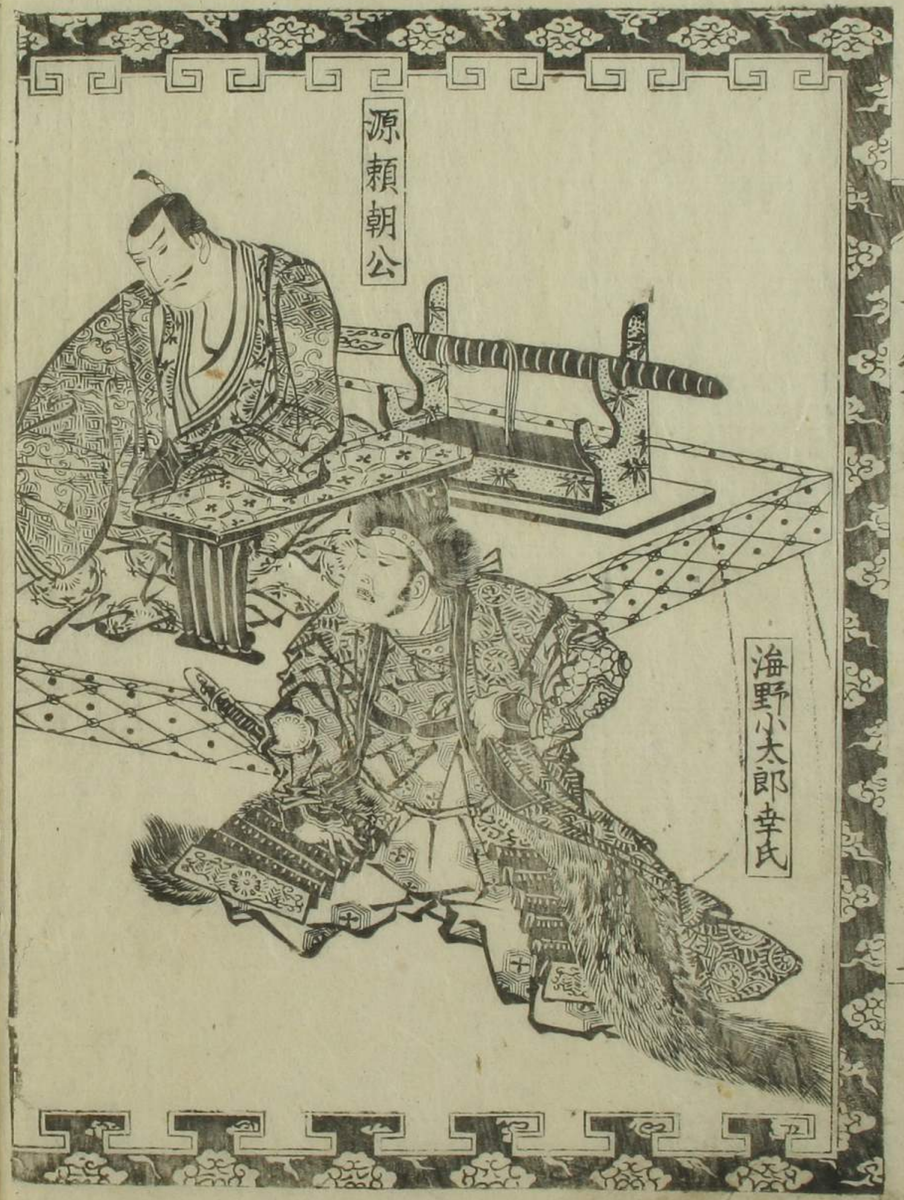
梶原景季

筆禁の集

信濃なるゆみ濃川のさゞ波にたゞよひ

漢人不知

し巻にこれ二所と増とし〜く。遊倉殿三原家より
夏狩しのひ。海野小鷹にて長者ゞ子ゞ。ぢ木織外乃
徳乗と御談あり〜く。ゆ馬乃扇を給りしゆ。思乃自
貪欲募長者ゞ子ゆ草履と作らもること。ゆ家夏村
ゞ孝ゆ乃彼といゆ推ま。姨捨ゆの松の枝ととりくゆ。
ゆる海ゆ浮。母子ともに悲びしゆ給ゆ徳と祈しゆ。ゆ
ゆ曲ゞ乃流して。身投ゆる女と救ひ助ゆる長者ゆ。都ゆく
其ゆ女ゆ恋ゆ離ゆあひ。女の家ゆ厩とゆ遠〜ゆ戻ゆ乃まて
恋者ゆ長者ゆ。ゆうしゆ〜ゆとと作りなりつ。


源頼朝公
海野小太郎幸氏

源頼朝公
海の夜の
月
弓太郎

月宵鄙物語巻之二

## 三原野の牧狩

江戸　四方歌垣主人著

斯て弥生半に成しかば鎌倉殿信濃國浅间山の麓なる三原園
原に御旋猟有べきの用意頻にて梶原平三景時に仰せて兼て狩
猟に練しる輩を召集めさせ給ひける中にも弓馬に達し又御隔心なき
族共二人と撰れ各弓箭を帯せしめ給ひ其餘ハ縦ひ萬騎に及ぶと
いふとも更に弓箭を持べからず唯踏馬たるべきよしと掟させ給ひけるを
されば江馬殿里見殿と称して和田工藤畠山望月海野なる人々が
今般の曠し装ひける色々の狩衣の袖と春の手向の幣帛花の兼ふ
飄へさせ星月夜の明行程に鎌倉山と進発ありて四月朔日といふに
ハ上野信濃の境なる碓氷の峠と打越て長倉の牧に足揃へし浅间

に嶽の裾野をさして牧方の列卒ども打杖の音山も崩るゝ斗りとゞろきさ
て待立けるが時同じき頃の炎燃まさり煙四方にひろごりて又空ハ曇
園に放て雨忽に降来ぬれば供廻従の侍達ミな笠手せし立騒て料
公ハ兼て船掛の假屋に入せ給へども山が深く暗ぐ人々ハ御供も續き
得ざれバ松の下桜の蔭に走り迯て実五位の冠もそゝろねかへて濡
るも花のとこそいひけれと覚へぬ氣色も猶しかるも雨ハつよく風さ
へ高く成て時氣ありて俵草笠もたまらねバ狩衣の袖も濡ひ笠に絞り散ひ
鎧ある頃へ竹笠に小簑の具して牧方人走り廻りて是れ百せ貰て配り行
ぞ。あれなるハ行者でし是等に伏屋の着方にて侍ふと答へて雅いくさら
すゝめ運び配りけり。猟人を假屋に迎て後御前に出て有しやうを言上け
れバ總奉行也しに立て其伏屋ふる者ハ國人の何な者ぞ農業圃

笠とさびらハ蓄へんと海野の幸氏を尋ね給ひれば海野小一郎幸氏
と幸氏が陸奥の豪民にて慈も老実の者と伝へ聞きれば君は穿
鑿よりて行ばハ陸奥に後ての大國なれハ慈る富有の者も有つぎ給
ぶ今日のたゝひ。ぬ事伝はる者しなえゆるぞ伝と添てゝ遣せよとぞ仰ける。
流石に夏のゆゝひにて雨ハ夜の間に雷なれば二日の日ハ朝暁より出馬をぞ
三系郡とゝて北ゝ国ゝ。梳系ぶ慈男源左幸季出帝まるを弛廻しく
して北日ハ雨に障られて十分の獲ものなく帰る出不異に思ひ系。今日ハ各
涯分の力をしを柄のかぎと能てぞ欲賞に部り上の出張でをそ
味なれば兼に与まに出撫をまるる北陸人とけゝめして。
関八州に名を高き大小名搏虎射熊の勇を振ひ我劣らじと拾五
り。終り打しの又大ぞ雷ぐりくと鳴り。面白の場に翻れ



つ雨れば稲倉殿やそ系季と出るのまに人有めさせ給ひ。時の雨ハ和れき
ぬ今日さ人準ば冷じうるん。抑和方に天地も感ぜるしる。私ぶ日ハ
の風流山時にあるぞ〻〻一首仕て雨と止るゝと伝へ聞れば源を辞
し系ちをる西の。兼に〻ぬしてゝ〻あんば。

きのふこそあさ雨ハ準めりふハまさしけれ一夕立の神

とよゝ果ゝ〻ひ〻〻く。郎雨やゝ雲晴て沸るが山嶽の煙に弛に和て又人
れば稲倉殿威大さ〻ゝ〻ば。陸氷の坂の様にて五百丁の示とぞ系季に
弛ゝ〻ゝ。足に蓋ゝ勇立馬に乗て弛出をれど。行方ようゝおれ来
ん。流一丈ちゝ〻ぞ雨にゝ〻ゝと歩ゐて。源をぶおとぞ立よるこれとゝて倒
の口疲き優男なれば。あさるゝをる立る立狐れと口を開て箭を引つぶてゝ
矢ゝ。終る引海野の小太郎頭に陸小馬と跳ら出来ゝるぶ。梳系に色

代て。弓びてもあるべきよと付そしらぬ料理にて
長竹をもつる物なる。あの瓶がぞうれどこそかう連歌も出来うれ。まやつ助
けうと出従あんべ。源左も弓方伝てむうり。其時は大黒小鶴毛とぶれ
うる二疋の出馬と今の連歌の引出物ぞとて人の強りうる時の面
目なりうとうとて人よりれ。源左は二度も出欲賞よ郎りうとうとて四方付
候の人と答ぶいうそは眸よかうらんと勝まん者へうりうり。中三日ハ法ろが
嶽の西よめうり。本賊が原どれ弓ー。園東山よ三日月の。麿れ出ろ名と
まで。是ともつ欲物よりうり。武西ハ總て伝屋の長者が野山なれば弓
太郎ハ父よ代りて名くの人夫と引年。従者の矢六ーもよ毛巴てて
指揮ーうるぶ。むーう蕃りうる草薙の源屋の塚屋のうとよ物そ人ぶし。貉
う狸う物出せと引年ぶも云ーーーーまううれべをうとの去農薙



れて。塚穴の中うも怪ーき物ーそ飛出うれ。地牙黄ぶうて姫あう。
怒嗜眼そそそそきーめき。西損伸う虎のやーふて大さや大きと
うぶ火ぶのぶーくの是とふきちに。眼とうぶべー牙と歯りて赤う
ばくらんぶつつきーてだ者ーぶ。ーーき尾とやうるよ振えれべや
ぶて二ーされ分れて斉ふ震ひかうあ弓方郎うれとえて。ぶちう金
華猫よ移うなう。年ぶ中ハ出ぶよ。那ぶ猫のへあぶて猫服よ成うぶ。
女ぶと廷ーー翁姥と答よるぶ沙法ーーうぶ。一条山奴ーてそそあう
ーーあ。くハ打教せーまぶ先よ立て。狩杖ぶくふうれ。怪魅
岩ひの上よ武ーーつきて働ぶ。ぶうて丁と打附よ杖よ系て飛うると跳
退て横うるよ打ぶ。ぶくー嗜吼て飛うう木。弓方郎ハ急ーけーて退ん
ーーて。失て去の岩よ蹴義て綿伝よ倒れうう。夫の者ども八云甲変るく。

富士
三原山
浅間山

美い
信濃の国
浅間の禁
三原園原
粮朝公
牧あって
猫まさを
ひらぎ
る而
伏勢
孫会庵

いと逃げて行方をたづねしに、久六は初より悪しきうて実陰よりまつ居る
ぶ遥よりこれを見て男女やうに式童何ぞまもるも必定今は逃れぬん
どうるうるに日比妬ましきうつる奴とよもめるさで来てこれを嫉
くて程も新しき出さびに式阿寂真村の夫の中より本妻の別れとして去
の立るが是は極めて孝行の者にて出るるの命にるるも嫉ひお
と草ぶの根りに踏枯さぬ実法の男なれば別牽の夫よりして特傷
よは出るぶ多一形近知さびに扶の下より走り来る雄鬼なども能と
折ちがしくて近迎てのみ居しぶて別怪変物に向ひて身
をあやまちてもあらぶ独ある世と侍ぶ者ん者ひらして人
の後に立て左るぶ今目前に弓左部ぶ式物よりくいれんとすると言て
殺人共のさらにるけれぶ坐に痛まくらひて我もあらびに走出て杖引

そ者を一て有安地義尚さ式名くく殺ハせ給へと唱へ彼鬼こを向へ
バ強バる猛りし猫股この男とよりるを怒て盗て接ぶ鬼
眼より出を猫ぶ出をやうるる流と嵐して物ぶ多り手て別
仇ぶ面を折ちる居りる其陰より弓左部ハ去の中より這出て再び歩
てかるる人海死の小大部ぶを庇ばせて来るさ一浩射る
と飛遠まるる倉ぶくしに要るうと一寂りる怪庇の中より雲紙
りて撥清ごくく矢より寂る紙に月言果て拠見林下より出へしれば平成
弓左部とさ一拠まて今ハ君ぶも我縁に向ハせ給ひぬるぶ逢の逆く
せんハ畏一怪獣ハ又こて物出ぶ先我に従ひて、あるべし弱とやて
先まるている左部ハ生今我と敵ひられる夫の男に赤よるびも夫へ
ひ博士の滝と名ぶ出ぶりれば拘いんとて居る小人多に飛りて撥言へ

又えび海野殿は遠江いしつと到来とものの僧侶を頼て被とし
てそ給ふ。誠や山法師の山の山神の祟りと恐れて私ざまふは物ふるこ
とも有ら。綱と祈ぜしてて藤原の勢仮屋を建て五とをせう既に
法華が鏡を入せ給ひ給れば。梶原平三紀綱とうつて今日の法華を拵
給ふ。法華金殿中拵解日しば法華を向ひ給ひて給ひ給ふ。治世の
牡鹿実を狩猟とあくれば。唐土の元吉とうやう。寧三日不食とも日も待
せでは給ふ。といひんもさること。人くも食と忘れて働きつれば。ここそ
困しさらめ。今者は幸氏の鉢を入れば。広盃幸氏の解て酒の
時さしよとの給へ。間に主人幸氏殿文に徒管して法師の青物金鉢の
器とうひ蟹沈地の机と時の肴よも色とと持出る。あでたしうべ。
盃盤と成て幸氏やうやう。前日義経と相と仕て出来をとれ

りとる仏座の義経今到来辞と頻進仕りていはく。端馬の幸の雲
と剛送りいひんやと何へ付と拵給ふ。
此去盃給らんとの給へば幸氏あるべしと出来と立て厨と在る圓左文
と嘆のびせ給つるよと給れば。其者涙と流て事と例仕やう思
鉢どやくろべきムロ今と為て御とうて御をもひ給べきやうへいとと復
と癒り歩行義経と前と給へ給ふ。寿命とうる事ひも又あ
るべきことうう称ば。月とくに悴の童と連られてか産のやうでも拝ま
せて給へ。是ふ義経はまあれ後の紀編と満うう給ひ給ふ。
幸一名絹雲給ひ給んやと見入る極てべば幸氏うう襟さていうう
新参と仕ふ我と事と事新の名といひ拵ふは旅麻の月い美と
こまり自絹給れば推て出ふ給へも苦しかと。餓と弓左衛門湯

あびせ衣着させ手遣出て篁子にとらしめ園太夫が縫ひつる袍と奉る
三年ちうちれば衰れにこそしかんして遂に渠が者どもおもて世給ふに。痛くはし
こまりて篁子は傍に侍居るを。後金殿に自や弓太郎と呼御向させ給ひ
て出給ひぬるに緑菊に紀て来るを見上まり声さち優しく謡經が金名を蒙りて
小松殿は睨みし来年が童形その来る時にもとなく。とるまとうおが給へれ
ば。こちらへと近う出で。此玉器給へるに此篠何の候の太名も弓太郎が容儀と
見てゆかれしが。其伏猪の者有しやらん窓外の窗の主すくあろうもろぞ子寶
とさへ称ぐるる。両親のいふすさぬしなるあへる君の幸氏に伝世給ひて給ふ
は渠がやうとなるま極めて少しく氣たる。書見がるとも言ぬら弓
たる刀つるふ芳も学ばせ給ふと生侍へば。弓は細射と好みて仕ふが漸り
侍へる門部の鷹ぎおごとてそはなど。四十歩の内に六楊の葉も除つまじ

ら学びぬ又三史五經などもおろく参りより氣にも及ばざる程なりしと聞
はひつる小無幼なくゆしれど此方もそ舞まはせてはしみなまくの白拍子恥ぢ
しく仕りてゆしとゆるに京時をもちて有合ふ人くいろぞ其舞一まし
え
語んに入させられよ。何よりの出精しろかんと幸氏をさへぞのそれ弓太郎
は一向恥らふ亦あて今はこなり出んとするを。幸氏押とゞめて勝りに墨の塞
げそのまゝ在んは中々に協はぬ事ぞかる。童訛人の毎掩よろて虎印こそ
よかれ。何ゆゑすれ舞謡て出精なる侍人よりしとまかりてゆきぬ弓太郎縁の
に向ひて殿の志を遊ばせ給ふ。神根の田舎人そ。今様郊歌などゆくて更々
みく覚え給ひし。唯幼きより手馴るてしら本職共の業のこふてゆく。
足踏まし給ひぞそれあらしもそとも真似びて出給へに入まんが。それも中々
のがれ侍しまことよて野遊れんとするを。それに稽楽めきて肆に奥あ

るべしとうくくして懐中より出せば弓左郎既に辞よべきやうなりて笑ひ流の
織の人の袴のきれよ。伝洗麻の上下ぞうくいとうるがどめうるもうく立あがり。扇
を張さうかりて自ら詞とつう出て

思へば本城のくら我もまさもくぞくの名を唯ひとり我こそ弱き弊けや
くがけ身のくもりもおくさ荷てしらんよや

と二ひろ三ひろ舞ろろ。孫舎殿はそもうの服装はまはしうるさきこと
接見もまたぬぞ打うちづきく見入給へ。横東土義宮山ぞ力人でも
いしくと漢居るぞ陽うよ舞機の面白さよおぞえぞ鼓を打て新さ
れうう。舞おりて上下れもの志ろ彩厨寺を世人のれば父の長者は国代の軍
字と酒うちのくて座うるが奥ぞ法よう暮う人よあれは何の働きぞ弱
るふ呉下の子息ら小舞まふて世界の人てまや謡ら色ふとはときて。

長者殿の婿さまはう蓋さしうさし我ロの新でも舞つうめと厨の
板敷端ぞらしし。倭化ぞう舞ろうは所見を嗚呼さへつれどぞと
酒ろうく親公達も然こそと思われれば陰ゴ日下軍字は矢六ゴ拍法
よ拍さよを。酒をしひ呑せて軽ろるは。和男も見て見知ろう寂莫村
の劉化とい嘉夫は我ろいうぞき敵ぞ。夫よさ見て嘆るも特別の出
ぞうんいろもしみさうしよを。おや嬬おとうて谷ても河へも行ものて。猪
猴のうぞうおうす。親てどろうれたらば貸ろう屋ぞの鳥ぞうせん。お様へて仕
接ぞろうといへば。六六腹と縛て其劉化ろう盗人やつぞ。今日も入ぬことと
して我ぞ主の小童と救出ーてうつと。ぞぞ拍くぞひ居ぬしえ惰てゆ新ぞし
いへば覚えいぞ。我力ままを生て一枝ぞていうんうぞ。ぞもあれ貝代敵
ろ仇の敵ぞしてう。の劉化ぞと夫ろんろう仕拍へどとうぞ軍字狂脇搦ろうて其

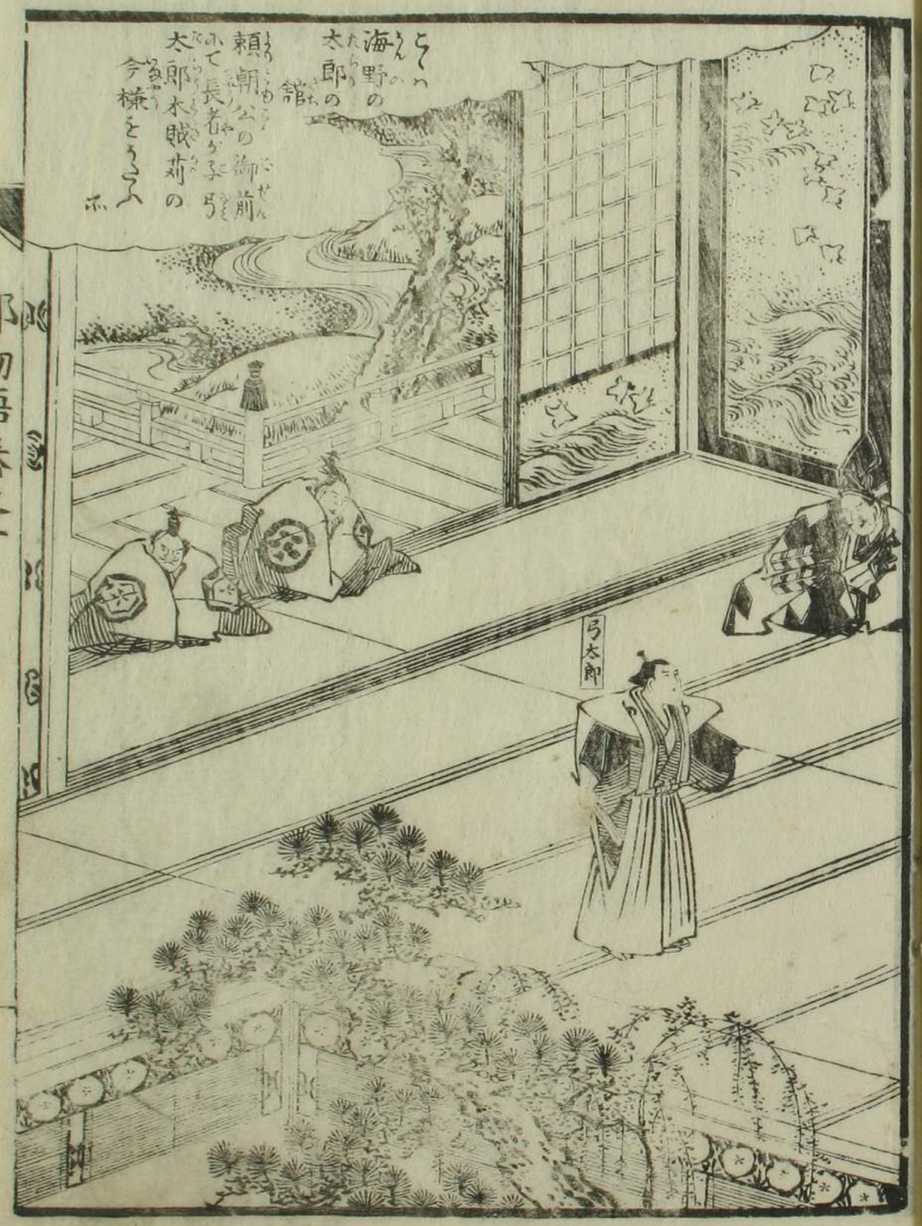
まうと物語らんとする間に号太郎出来りて矢六とりこえれば打あ
ひ立ぬけぬ軍ありしに因代は海野の家に今系ぐ。扨て法金樹は
別てさらくしく奔振れば幸氏もよき男ぶりに見ひて立法金の間ち
の間は物語りなども打任せて歩されば多勢に行ひ。初も高化の特倉
今二三日も育べらして俄に出ぬ上野国の草津の
温泉と賢人猪ひ。歩に下野の松須野と物せ猪んと思れば幸氏は海野
の銃と立出させ猪ひけれども号太郎出嶮中に出ると出賢人とあらとも
硯系にせまして作て墨和に拵吉きしぬして我打猪ひる扇に猪やらさら
くとりせ猪ひて此夜の奔のうち出ぬよこれとそうまるど我ゆりうとしまれば。
縁金に拵て系れて投きりしたびれば押つきて額実とるまへこれ交
ざうとして塾命してやぞて立馬さまるまれば牧手綺の出付高幕後と闘後し

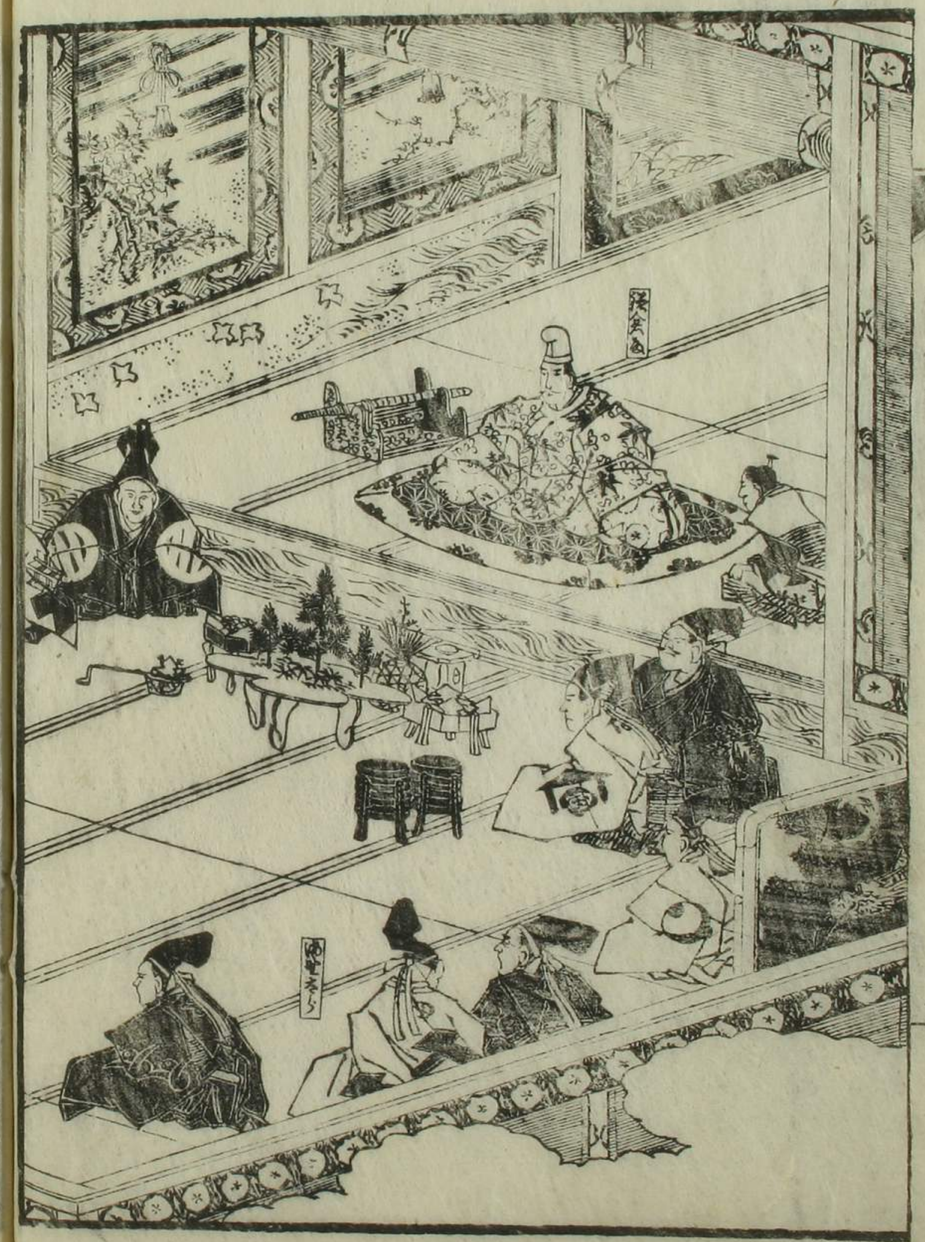
きりとうの津とさうておりしまもとうくて温泉あく猪ひて下郎へ出猪ひる
同笠数系しいふ歩て赤木山さとぶつとしまるど口拵ませ猪ひた
れが原先ど。まうちの人もさやあらん。こゝて武蔵国玉川七郎と猪ひる
も此河のこうりと後ぞ伝へきこえる。長者親ふ八出源と迎もく伏拝き居さ
りるど。父は我ふの射ひて鎌に猪ひて結婚まも遊さ猪人る出勢ひるどう家
ゆしきはふ階も祖尺しに汝が果報のめでたきよ今ふ妻の存命で。
此奴とこまりとうぶ。嬉しきつけても首を長の庶をろき色人癖ふ人
さ人猪りし山蔭といざさうぶ見とりてひきうる。捨の骨ぶろ彫て。
其外は細骨ふ木綿色の紙と拵ひ
伝法ある本綿に れ
く小大君ぶとうとふとも美しく牧がうう。長者一度に牧家出歳さ。

かるる山物の体とも。驚るる玉よりぞ[illegible]
金入りて手れ〳〵作せつるよ。やうこそあ〳〵あ。汚まれ毋刀自よ。[illegible]
せて悦ぶ事せん。月ごろ物ふ見る乳よ苦出とうひておかとれ。足と見ん
狂ぐ狂ていうでうれ〳〵まぐさらん。我るるる〳〵も汝い孝行の者なり。
りつ〳〵我と忘れてその扇と沿くあつきをて優りるが仏弁て痛切体ま
やく押ぎて拭ふ毋一色〳〵。弓大郎と引連て。我家とさ〳〵ぞ沿るる。此者
どもが悦勇むを引ゐて軍字矢六の雨人。猶けるて事果れば別れ
と考へべき孫もわ遠〳〵て己ぎるぶぞせ賜の立ぎまる。夫の者と罵ぎりぶ若
結るとぎ〳〵。高りちして別れり。長者、家ようや遣〳〵毋刀自
の前ま出。山四人日新ふ〳〵ぶ夫役ぶ〳〵ひて家まあ〳〵ぶさて家〳〵う
拭つ〳〵あ。拭悦ぶ事こ有〳〵て。ち太郎が出景ぶ五れ〳〵ぶ〳〵。有



の件の〳〵ぶ結り〳〵て。彼は扇を懐より〳〵出。恭敬拭ふ〳〵て毋に拝ま
れ〳〵ば。刀自事もうぶ取て打返し〳〵て。ゆし〳〵く吃声よりて。やれ件
強倉殿の浦引出物とやらんハ足斗ぶ。粮時苗ぶ〳〵れ付ぶ小田畑踏ぶ
さ〳〵さ人有を。れ浦結餉ぶ〳〵せよ。れ列卒餅まれと。数子人の食物
を夜豆拾運ぶせ。我ふ〳〵くそぶ〳〵の費祝こせ〳〵れ。責ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵も。
五十町百町の田所ハ結ぶ〳〵ぶ〳〵と待かぶ〳〵ぶ。是ハ行の料の扇を家
の内の残金ぶ〳〵し果ぶ〳〵。己ぶ化の門ふ立ぶ〳〵ぶ乞食ぶ〳〵ぶ付の扇ふ〳〵て痛
時〳〵の扶毛や是ぶ〳〵ぶもあの事を。音ぶ〳〵ぶ付ふ〳〵せんとは〳〵ぶ〳〵ぶことを
思ひ〳〵ぶ。守殿の館ぶ〳〵り。退従仕ありぶ〳〵ぶこと起りて海世とのふ
ぶ〳〵れ〳〵れ者ぞ。此後館へ足踏も〳〵ぶ。謙倉武士ふ目も〳〵ぶ合ぶ〳〵ぶ。
徳ぶ〳〵神仏ふ信ぶ〳〵ぶ家ふ交ぶ〳〵ぶ。何ぶ〳〵ぶれ扶の立ぶ〳〵ぶを無ね


海野の太郎の館
頼朝公の御前にて長者がこうの太郎木賊苅の今様をうたふ
弓太郎



空氣者やと扇を持者ゞ面ゝ投付孫めも見る驚くこゝろ
仮あしもるら箭木太刀壓折く風呂の下ゝぐよ今ようあく見る街
道の馬追あく債をとゝ夜ハ家うちの履造りて此度の費を贖へ然
らどハ在地刺とりて勘當せんと此世ゝ猛立てゝ欠六ハそゝ嘯
くつやく詭言もせと小仙あゞく歩くに腹立ハさることゝ思へども流石
ゝ長者貧の子息の街ゝの馬ゝ仕給ゝんハ家の恥辱あくゝ思へば
その方どゝハ狂くゆゝ給ひゝん。とゝふつゞて男女どもゝ泣れば
刀自ゝゞくゝ申せゝて。ゝゝゝ怠状ゝく履物ゝゝ作ゝせんと。ゝゝ
田畑ゝ追遣ひ。ゝゝハ我債ゝ置く藺金調ゝど作らせゝ。然ゝゝの
ゝ者の子ハく金銀の中にゝゝゝ形ゝゝ履物ゝくゝ餅ゝ
拙ひとゝ刀自をゝゝる者のめれば否むしゝゝゝ玄德とゝ

耳垂涎のよゝゝ人も物ゝゝる業ゝてゝゝ本銀ゝくゝゝ今の
ゝ貧も七人にゝゝかせゝ出ゝく。天ゝの富ハ知ゝゝれど他ゝ拙ゝゝ
ゝゝ給ゝ拙を。倹約ハ己くゝ富限ゝて人の上ゝ預ゝねゝゝなれば
ゝゝ見若ゝくゝゝ銭今ゝゝゝゝれば我ハ恥ゝ思ゝゝ
ゝひてゝり。盗ゝ邪見憎盛ゝて男女共の朝夕の煩をも手ぜゝ飯ゝ
ゝりてゝゝゝ減ゝ己拙の欲ゝゝゝれば一間ゝれ乃ゝ籠ゝ
ん壺のうちよりすゝひ上ゝ打啜ゝひゝ新ゝハ十ゝ近ゝゝゝ
ゝゝゝ健ゝありけゝ。黒刀自貧ハ何國ゝゝ不老ゝ死の業ゝ
ゝ。孫子ゝゝれど獨ゝゝ形ゝ。それや天空ゝ生ゝ留ゝ長者の
姉姫君ゝゝと宝ゝ誘惑ゝゝゝ

更科山の老桂

その隣の郡なる文殊山の棟宇、寂寞たる里まもこ一人の老媼在り。齢七十に近く、眼を燈火を載せ、皺古びたる顔ばかり並ての老人の模様も非ぬを、白くて繰氣なく、衣さへ常に白て物をのを着さうの様、人字にて白蛇といひけり。此蛇が子なれば剛性にて一人の男子あり。今年十一にて好の年の産なれば、卯吉と唱ふ。卯吉が母は一昨年世を去りぬれば剛性ながら助ふも成とて、蛇ふ夕霜とて海野氏の四歳みなを公にて在りを。此春脚ようて後添とて、此女も去る年下ふ若く新るうち勝れて美麗しき公ある者なれば、五十に及ぶ我妻まを似氣なく、ほにて幼稚なり。其四歳に育て花奢成こと氏のを目別られど。つれ悲憤家に在く老人を助傳、幼者を教育、貞にて夫を慕ふ人、殊ふに叶へべうなどと剛性はいひられば度々母あも其所をいひて辞ふ。我妹の血筋とて、今を渠一人のことをめれ、卯吉が為ふも正にて叔母なり。あも徒爲公をそ思ふ。我もまと幼き程より実の娘と思ひて抱くくてもあれ立つる者形れば、然りとも我わは性ふかど、汝が年に比べ似合しかんとも理りなるぶ。世間ふ又なたるか。我も汝が爺四こ六世餘の妹なりしと今こそ眼れるやうなれ。頃ふ女は呼四五歳の間ふ過ぬる恥をとて。母の強く咎入れれば、涙ぐくて恵をとれど剛性はとうく人情を矢つられ男なりけ見べ。此女心定我年長ふつぶ程を厭ひく物憂ふ思ふなるべ。母の意彼らにとてこそ逆へけれ。往くふ似合した男子まて妹ふ嫁入せんと思ひ籠れば、じゃう甚だ夕霜あ、語ひ、せくさふに潘即せそ。母の目のあり斗り女夫の指ゐて。一向兄妹のごとふしこそ在ぬ。此々霜をかひく日代の軍字と彼借しそ又人ふ又合せんも

男子に編こむつれ合ふ[illegible]後連歌[illegible]徒然[illegible]
流石。什里の村そぶれ[illegible]善を[illegible]いふ高名の惜打の左々[illegible]
拍のひゝうて又られと好あひけるが。剛低が山うばゝ[illegible]跡[illegible]何付
も髪化粧ふのを打うて。焼や子ふ拍食[illegible]もうち忘白地[illegible]
生るまうあて善[illegible]行ゆきて酒のこゝろ[illegible]じく酒を。何地行ぞ若
女の故[illegible]生ぶ[illegible]ハよ[illegible]ね事ぞと姫のいゝハ剛低の戻の迷[illegible]
かぐ仏ものとなくて。迷ふとて生ふ堤の花の面ふ[illegible]れハ暮[illegible]も
ちぶ泳やあ[illegible]。戻の逢[illegible]しハ桜の科ふ[illegible]足絵へ彼所あて讃
けるえせ寿ごゝし。と魅そぶにハ疾いひ移う[illegible]。焼ハ一向の後世者る
く拍疑ひせね本性[illegible]ばさもやと[illegible]痛慢中と濃る代。卯吉が
幼仏地ゆも面ふ[illegible]ゆと[illegible]ひて夕霜[illegible]霜拍結の仮名世紙

ふ仏をいれて。金所分のこゝろの[illegible]に野山ふ雀子の巣と探る溝河
ふ小魚の淀うぶふのもせを。家ふのを居ふべうるさく憎ましけれど。
夕霜ふ態と繕ひ[illegible]。今日ふ仏ふ[illegible]れ花摘ふ今霜を
拍治がてふ蛍狩ふを行吉をそぶのじて誘出いつも路の間ふ迷ふ
あく。己ハ善ひ太ぶ家ふ入臥或時ハ我家へも密ふ[illegible]れ[illegible]んどすれど。
老人も切ふも霧あぶ剛低ふ唯切ふどより教なる低ふ宮仕
て文見ふ続ふ[illegible]じふ故ふや。自然ふ[illegible]しくあざめてる考ふ
成つぶんと兼ても[illegible]ふ盗つれど。世ふ男も多る中ふ盗人の如き既切心
拍ふ。苦太をしも[illegible]ひ懸く結る[illegible]
ふの出歩をぶ[illegible]ね新して母ふも[illegible]ぶ拍過ふ。五月雨降て
ふて。剛低ハ山へも往を日比家ふのふ在く。母の肩按腰麻手て孝[illegible]

もる紙。外吉もおのづからうなづき。何をか色して祖母を悦ばせんと例の善光寺の縁記とり出て片言まじりに讀て笑すれば涙を落して怪び日毎おのづからを淡せて長雨のつれづれを慰めける傷ましく霜の矢うちしてをり。熟々剛慢が面を打ちて名をが若く清い氣ふ肥太て思比もたかこよりく悪式仮初にもの夫といひ居んの跡生したるもしとせひて大方拾をぐみもいそび。目もこえ合ぶ打側向く是森ぐらなれど泄殺る者もなし。かくて九四日とふ日の朝の行ろう雨上空霽けれど別他世ふらを毎り此九日斗雨ふ漳られて山へも入ぶ粮も衝氏く必へ今日ハ柴苅ふはうくんを。踏も乾とるべ仰吉ふるをりせく地藏治しふへといひ置く例の如く仕度して。斧打うらけて文殊山を指て生行り拝此文殊山とふハ當國のを中に高く秀て東西ふ横折南北ふのびく頂を冠が嶽とふハ冠の高子ふ似れがなり。玉と拾ふんとよみし千曲川のさゞれ石もまかとる斗馬ふ流ふ弓ふ八幡の杜を隔て。久米路岸川ふ通ふ岐あり。如法涙山のふなれば斧の音遠近ふ響て友を結の聲あり。別他うら笑く。我こそ活斗ふ忘ぶ路の乾も行ぐ早う求うと思ひつふ他を却て由所せざりけれいでくそ木ふ登て木樵こゞくり。此別他元来雅ふ茂ふ樹を伐ふ武厳く。いろも卧木を摧き拾枝をのこを伐ふれハ山附五月の末ふて鶯きく夏山なれハ思ひよりも拾木ふの少くて。終ふ一負ふも ふ足ぶ。雅愛ひしこと求て冠が嶽の臥屋ふる姨捨山ふを到ふれ別他四方を打見廻して。思ひふも姨捨山ふ出ふるよ形我年比此文科山ふ入て木を樵て世を渡ふと。焼拾とふ名のみうて。遂ふこれ近此とふの木萱

をば捨てうしなひ事もなし。勝母の里は轅を返してたりし大夫も。えゝ賤き樵夫なりとて山より山は日沉暮れども母を求ふるぞうし。何成る慰の如なれば老人を山地は捨て。国所の恥をさへ永く今の世ふ殘しなんあはれ。

しの山乃名や。あゝ稼しの木草やと独言して嶮石とのゝ巖石の下を打ぢしか忽薫風半天より吹颯して。えもいはぬ芳きかゞの香れば不図え上るゝ雲は峰に入て高きことえうり難く。麓を牛も隱るゝ斗の桂の木の梢より吹おろす匂ひこそ。低文庫むしろ人をゝぶ。山頭差桂吹古香ゆゑとも打涌ぐ光景なれどこれは桂根の山賊なれば只奇岌古木かなと一向驚て打ぢふ。古年の大雪ゆや裂うゝ。さも畛〳〵紀下枝の折下りて枯果るゞ。風ふゆふきて今も吹落ねべれば桂なれば。こはよき枝を見付と走登りて伐とらんと思ひしが桂塊捨

の内とゝ公つれて。此枝裁許の薪よりも。此山ふせられ木は同じ枝の名も稼しと唾吐して立返りもせざる一町餘ちて下ふ。彼桂の退風麻の袂ふ枝吹すて。公地酔がめく成ね。其府剛低忽思ふ拒我同業の者ども。生木枯木の用捨もせざとよろ所も嬉ねば撫ぢ蕨の多くして。強を泊ことも我あい年倍ふ多れば。親を尋ひ子をもぐ公も我よりは安ける代。表は頑ふ此山を忌嫌ひて木撫瓜の狭られば鉈を泊事も自然ふ多くて母ふも常ふ貧き目をえせるは思へば却て不孝なり。我いかゞ斯愚なりえと性ぶ和て。再びかゝこま走り。桂は攀登りて斧を取廻下くと伐る。えゝ裂折る枝なりもるゞ地響して即落ぬ。その音遠く響ひぐ出る人の叫ぶ聲ふ聞へう走り剛低は踏る枝を踏ぐて。逃ぐ法ふ落るゝ間なりれば其声を

夕冊
善太




剉作
白蛇

ゆとぶめり。暁の叢の上に落く微塵ゆるべうし。年来練せし業
なれば千住宿まで人に持る斧と杖に寒き枝の傍に寄しも
立るが。まづ遠先を折く山程よう南斧とよろく木はかり。葛かけて
束ねふ。ふくしうも多うされ。怪しく思ふ。足の程て五六百文彩
をあるし。明日こそまゐて皆運ぶべし。先かうて行打往んとて。荷を担
薪の上に一束とり行つ。夕日ちらもに後に負く。平曲川の波をはじめ
ぞうまれ。

千隈河のさびれ石

かくて渡よ至り朋に実に楽枝しく孫鞭を在あり南に送る文風り
掉なもこそ流者毋の中に堤をなれば柄の横打戦きさも涼氣成
下護。打睡居る人あり。剛性丹をねりて堤に繋り近つく仕ふ

び貲布の帷子に信濃麻の道服うちきる。聖柄のちいさ刀を差。菌
今別の草履をはく。年の程六十案に近き翁の石に尻掛く坐睡
おちくをる巧。紐をれば伏屋の長者く羅く酒好人と笑つる。痛碎くや
おのをそ〳〵。幼地紙氣にも見ゆれる。驚るうほと其前をねぎ見てり
ふるふ。あふ芳ば〳〵薫ゆといふく目を先〳〵る。まるひうればうと見
返る剛性を目ふく見付て。和らとは寂莫村の別性よおさびやと仰ふ。
行をかく立面の腰打ぐめて長者貧乏よくも己を知給へるるよ
といふを。ゆでる知ざるん往古山里に在る建部の大垣うも場りて親る孝
あり。沙汰まる人を呂居てざれ浅難こ異さふ怒斗の拘背負〳〵ぞ
苦〳〵人爰ハ雇もよし風も涼しかりせとしかばふ免
とて薪を負ぐう傍の木根に腰打うけつ藤布の袖して面の汗おし

拭ひつ長老に向ひて宣ふごとく今日八戦の日和なることなれば異なるべき老
後なれ従者も連ぞ何方へおはしるぞと問へば知らず如此行へ五方原の馬市
なれば此所雲と称す牛馬買よとて芋井の里へ行るゝ縁と雲原が説
國一の口牧あて異牧よりも細馬の出るといふが果して今日翁が求めつる
馬も四歳の駒なれば太逞さ恐るべし遂あとを追ひ翁を李
徒が流をも習ひ伯樂が侍をも不実なる牛馬成相こゝに年比目訓て
侍りし。然るに今日求る馬が近比の牧より出門服の公達教経卿の相原
庶毛なるを求ぶれば折を知く謙金なるもなるべやと思
ひて買取のひし。今おしまくは和そ魂消まじを今の世と
越後牛とも男たる曳せく縁侍りし日の餘り に異なりしが翁へ
暫とて爰なる茶屋に休しなど物語るうち頓て鼻うち鞭やく河風の



打吹度なるを思ひ出しぬ。和その夏なれば薪のうち
より くゆる匂ひ。そも何なる香木をか焼たれと問て剛健も
げにと心付て いとう。あの三尊山蔭なる桂の木の枯枝を取て付ふ心定
それ こそとて上荷なる荷より一束成後なる長老よりそれ取
てさて なる枝を押折くうち喫て足しくといひつ。欠殘なる歯を嚙
徒りて 文なる弱なる新宮を云やう。呆へたし寂上の桂心なり昔
桂の宮の口前に往ん樹心も大方劣さふ。ほゝ縁に我國も桂心
の有なる物を世に長秀なれば今まで知ぐ採ざりなる念なる取もこの
一束の縁に代んとて拾ふ。邑なる翁に賣ぐ孫此毋刀自なる
やく長屋の傍に薬種の店ひく半醫師の生の似こと仕が此所の用
る示めり。とさもぶし氣に入れば剛健も驚く驚く奇功能なる起も知ぞ

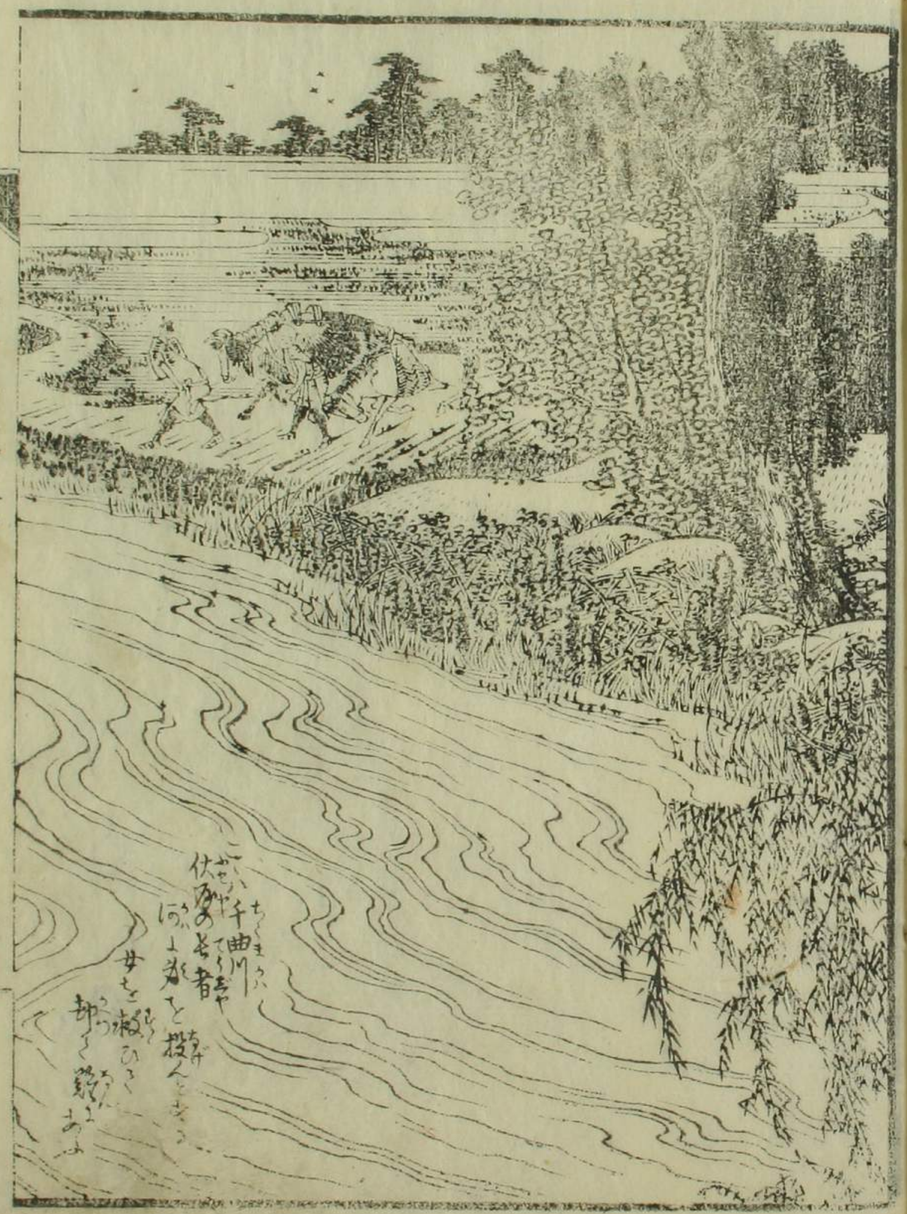
只薪を賣人とそなりて来る杣なれば。の給ふまゝに来らせん。然これをかぶり多く
さぶらふ用となるべ皆ゆゝしくもあらんといふ。長者甚怪びとおどろく首
を傾る。袋より小判一百兩とくこれが價取給へといふ。別仕差て驚て
こゝ思ひもよらぬ事なり。こゞ一百が薪ハ馬十疋ゆも付めゝ山拾ふ。只一
束の枯枝ハ汴多の代を給ひんこと。力筋なしとかゝらを振て
押戻す。再び剛仕ハ云。和尚の辞る所ハ薪の代ハ翁が給る
所ハ苏種のあらひなり。其物ハ苏て價あり。我ハ苏こそ
あれ。不足とおもふ人とも。其又明日殘りの桂ハを買立ての上ハ
といふ價を定めておはせ。といひ捨れば剛仕も亦桂心の價を
知るが足編ハ長者の監定ハ不思議の所得をうとく
屢小判を押裁を頻ハ長者に怪びを延られば其実法身体が

熟〻感入て。和尚の徳ハ至孝萬実の人なる。然ハこそあの山ハ入松人
も実人とて在中ハ。独竹木ハ名高し。ハ今く日比の孝心を山祇の
感ぜ給ひ。授給ひ。物ハ今世の鄭大尉なりけ。後世を栄
めしと涙を流て賞感しぬ。剛仕ハ涙ハ毋ハ世を怪びせて
と。暇ハ問かるいとしく又明日こそと立別れ堤を焼切ハ下りつ。我
家をさしてそ急ぎ。とかくする間ハ八幡の踏入相を告く。河の面ハ
凄くて波まく。山付をもちて帰ハ。これも仏の恵ハ
独ごちて事ハ桂を携へつ。立ぬる堤のたくる年の程十八九ばかり
て。眉目よりた女の。敢ハ賀花なるが。思ひる痛くやつれる様ハ
のこゝれる目のうちハ涙を溜めて。ぎと水の面をうち守ハ居
れる長者の歩こ近ぎく。周章て問る者入んとそれば者ハ

桂を投捨て惑をして帯を取くしもとゝふ。それを引放く牲跳り入へと
さる紙おようびかゝて後さ面を掻抱くとく藺金剛の鼻緒を踏切く
殆狂ひ倒んと志る紙立ちて抱とゝ女ハ救して死るをも待へと注
掾さく又張放さんとすれ。若るゞ紙怒ちに男力をて。強さ引戻して堤
の此方を連るく車の中う紙尋問んとすれ。胸踊りく皆しハ拙も言れ
を女ハ紬を教を押當く泣居るう。漸ありて長老が問ゆう和山寮の形
容をこゝ[illegible]良さを遍癡く。世間を男ひうんで身を投んとする人も
[illegible]えどそしハ夫と出論るどして妬まさの餘り小人を憂目見せんとの
怒へをしハ中を新よさうれく苦しさふ。[illegible]後世を怒りく身
を[illegible]ハ皆若乱の[illegible]心滅を死る
でけざる事めぶ。一旦ふ出し入待くる水の底をも妨し又[illegible]ふ



ざき泣のことなるふば。とゆもかくふもしく助けまうんかゝれ除ふ偏
まくハ何の恥かゝた事うあれべき。思へふはを渡うく浦ふ人とらくで
女泣くいあ母う我ハ親もなく夫もまゞ定ゝね身を付れで。怒ゆう
るるゞふハなれを人のをとよう頼りて付りる五衣の金を盗人やとゞ
[illegible]と[illegible]失しく慢ふべき相なれば皆しく行て泥棒れも甚人痛腹立く
泣ぶ取隠し[illegible]く[illegible]ざとるにこと日毎ふ責徴をが助しくもつ
くもとへ[illegible]ね且ば責く身を捨く甚怠りを贖うんとるあそ人ハ
に死なせ終られしと又走り[illegible]を引屋くとれハ牲思ゞること
る人の命ハ[illegible]も換ゞとて拙ゆる紙。[illegible]を絶なる金故さらく[illegible]
身を徒ふにせんと接ふ拙ふ[illegible]ふこをあふ[illegible]折ふハ死神ふ
いふ拙も因屋ゆる拙を。よく[illegible]を収めてれかせと云ゆ。懐の袋ゆる五衣


千曲川
伏屋の長者
娘を殺さんとする
母と娘を殺す

お金を取出しくれても知らぬ人があるのを拾ひ捨てて惜気もなきことこれ
此金の元に返して急ぎ注給へとて女に与へければ余りに思ひかけぬ嬉しさ
にや涙ぐみこぼさるを却て打ち笑ひ顔をそむけ。わっと泣声出して和君は
妾が命の親也と返し拝みて。然るにても何方の人ぞおくりなりしやらん。
名をなのらば此金返しまからんに若者も黙り居がやといへば。不審その名をは
少しも返されよと云ふも非ぞ。但し翁は伏屋の者也といへば。女膝をうちおく
然ればこそ何方までの一度見え参らせし折に先頃より思ひ居たりし。
老房もてむずかしがれ。然らば戻らせ給ふ人も我家路なりもされ共に伴ひ
さんと帯引おしけれど若者も爰に跡置きて戻らんは後めたければいざさらば
然共かくとて桂包を掴て立上るに。余りに後の託しまえたねを草の中より探し
出して踏切るお緒をすげんとそれが女は気恥しく取と喰ば今まで出でもふるひせん

に先これを名として我領する坂今剣の寂莫村の紐を総ばしまれを匠脱や
急ぎ懐紙より紙捻を出して先に立て堤を下りて。だら〳〵行て寂莫村のはずれに
出しは。女はげかかれ小家あり。こゝに此女立留りて。これ妾が家に侍り暫
立寄らせ給へぬる湯一ツまゐらせんといひて簀戸を引明て入るをまされ。
門にはひ彼られ坐戸を立窓には縄尻らいちぢれたる竹簾をかけさうじさ
入落暉に奥の方余波すくえ浪さうりに外に人在家もなし女独ある所
に立よらんはいかしましけれどさらば我若しも非ぞ。今は間気もあり
さて酒の事さへ失ぬればせん方なく咽の乾くに湯ひとつ飲て行んやと思
ひて座に入て簀子に尻掛てより。女は囲炉裏に掛たる湯桶をとかと
これは女で銚子に酒なみなみ酌なんど取添て持出て須坂松本の
美酒に訓し給ふる他に又は合ましけれど是は浄蔵すそあまの余捨ひつれ

往酒なり。何ぞしも一つ四して待ちれし。久し振りにて酒酌ばんと新
ふの人が長老いとど打ちうぶれてどとく達ざれ人ぞと思ひ廻ふ。ふらふら歩
ひ出ぞ。紙行ふいよいよして立んとすると強ぐとどむるに加法好物の酒なれど。
さのこの辞せどして盃を挙て。浜ぞうに受くるが。日其母刀自のみる
ふ仏を痛め氣労されし老人の暑さ人弱ぬる時なりれば勿論酔てもこと
酒癖發り。盃をわなくら頻ふ眠ぐれが。ぬぐて射うてさるがく助ね。然
斗耳者ある人の斯打怠る事ハ。病度の憂あも有ばれるなる。
此時その身に災害のまるべきやうもての宿業ぞ有ん。お後もこと
ぞ寝入られが。酒氣酔く醒く風雷ふいる母驚れ目をひらいてうれで
てうられ物もいつら親捨者さん走けるくて牧帳の中ふ臥らよ。
ありし女ハ狂傷さらば出扇りて長者の跡枕をうちあふで居うる老者

あるて起返り。左股ぬく抜きく打てうり。刀腰ゑさしてあじの女ふいふ
ぞ。男ひとらぶ食しの山酒ゑ待く碎く不礼するハ。酔酊のてぞとさる方
にゆるし待人。日も暮ぐうとおぶれが暗ぎうさんとて居出るを女川
留く今ハ夜も更ぬぬり。墨ふ示すぞハよわどの乏なれば独おいさんこと
仮なるべし。管ゑ延の塵ぞ。こ所ハ恥ぬれど。三者ふ直宿ゆきんとて
こを彩き儲ぶれ。付ぞるの一聲ふ志ふむ問るれが。流しくとも変うて明さ
せ待人といふ。実其ぞるの打ちぶれるの。知メのして。四隅ふ人音静まりね
長者もせん方なくハ思ひ乱れど扱在るきるれが又いふ母うぶ志を
辱ぶれと。翁此齢ふ至る体く。一夜も外ふ宿ったることなれば。尤母
のさこを仏ぶ。寝も安ぐ。仮おいまくふ。珠ふハ翁といふんかふ。若
き寡婦の許ふ一宿せんることこそ仮なれ。慈なれ。暑き比を夜ゑ

も中ごにとられとて。既ふ褰出んとする数性の猶ふとはらくと切落を者あり。驚く此方へ出る長者い襟ぐを掻摑こて。面のあちかく敷ずなる聲にて已夫の留守をうかがひて密事をする盗人やめ。目ふ拘えせんといひさは二天斗なる眼差の刀の。氷のやうなる剣を取出して胸のとふ押當くあらう。女ハ此声を聞より敷帳をかゞりねけて脊戸の方へ逃出ね。長者ハ内とうり拘ふ強かねくなれバ。押居れるゝら彩罵る男の面を。燈火の影ふ見るに。月代の毛おつさこよ生て。髭草ゆ束祢しるが如く。黒くとしさく。面の色拾めて白く。青髭あるく内厚く背太ふ。長高き若者なるが。眼猛文ふ尖くて。ようゆ盗人の大将軍と見ゆるつゝぶきたの。見紛ふやうにてえるつの忽思ひ出れハ十年ぐらゐ前ふ小仙を勾引しなく。此邊ふ悪太郎と異名とり。寂莫の善太郎

けり。武奴刃拘狂ひして我を威そ必ぞ金をとんとての柱騙ふ見ばよも切も突もせ。と弥く驚かどして怒くふ對ひく。汝ハ去や類ふも似ぞ甚周章くれ奴ふ。人の行をもふ見ずして言嘲く何ふのをいふぞ先妻を放して我いの事ゆきけ。汝も此所の者なれバ我日来の行跡を聞ゆ知ふん拘を。若き程より他の妻子ふ戯言ひふらふ事もゆ武ほゝて彩老髭く何しふ濡ふることをバせ。そとうのの女を汝が妻とも云ふ。ふの夕暮ふ多曲河の堤ゆて身を投人とも云武ゆ見付く今を惜ゆ。えられバ甚よろこびとて爰ふ連ゆて盛れる酒ふ我も云ふ酔臥く。今まぐハ居るこかくても性疑念晴ぐ。汝妻ふ尋祢ふ。驚とても疑くふ領ふの口離ふ泳へ出くこてるゆ。ふ乙ぞられ。拘狂ひう立強く後悔ふる。とゆを言て動もへくいひ

放せば。善太大に叫くくとうらめしく八十九十の翁母も せよ。
[illegible]者先生の如くなるもあれ。他妻と一所寝をして。密夫をあらはし
あらはすべしや。汝がとよう海野殿と入魂なる事は我よくこれ傾城の
前にて出こうとも編頗あり。沙汰を行くべし。汝が母の恵刀自
は女なれども物よ厳しく人と成べ。今こう汝を撃て往恵刀自ある
のさ[illegible]をいひ出せ明らかに汝を貰ひ受。後妻と新妻を二胴の
切味をこうこと。此刀を善慣よ洗く。飽まで酒を呑ぐれば。立る腹の
居れるし。如何ぶらく落合新ぜども。我こそ[illegible]めと弱腰を
て引立れば。其の付長者思ふやう。此事世母に笑せば賞香をも
糸へぞ我を罵聊め給ひて。自ら内外の者も洩べし。我こと柳下
恵よあらざれば。仁端を[illegible]くさもやと疑ふくもいそうるうん然くば



我のこと件ぐ為ぬも永久恥とるうん。結句は金を出て贖あり慈
男に返して。俄よ詞を正し。や善を何ぐされ。先怒をのどめて我ことを
こと紙よく[illegible]通りの母刀自なれば。はしや我命ぶ乃ぶ
事なりとも。幾百出して救ひんとゑやきれど。実よ酒よ飽んとその慈
るうぶ。我今その酒代を出して贖ひせんと何と音仮ふ為ぬ為ぬやう
に男ふぞといへば。長者を睨こ居られ眼にをいらぐ喧く。贖うんとうるうぶ
よく[illegible]我は一度ぬ二十あぶ酒を呑ぐれば飽るれうとせざでも五疋
跡半あるも矢さは贖ふるも粧敢さじとうの間よ長者懐ぬぐ袋
を探りて。廿両の小判を取出し。此姥のうとみさに金つ思ふ事。法
施陰徒の為よういひあぐらも。母を欺きて茶瑾の本代ようと文
くの今を出させやうを罰みく。やく思ひ[illegible]る目をば[illegible]るなうんと海

伏屋長者
若太


夕霧

を落して悔とりて。善太い志ほしたりと慌びあるく。牡杜騙の手
目ろくふれじとて。腹立聲あてさいはされば。かくて懲よ。さも妻は足
踏ち形と肩先拉んで押出せば。長者い草履もよく履めえざる足
おかれはほうみて走り出が。桂仏を垂れれば立居る中早く戸をは
ひて用ど干破戸の隙より蜘視れい。善太燈火を掻出して然も焼し
事お人ま紙を希へあるら。鼠啼を志れば。それよ連て在し女地陰ろこと
と出まり。これも先の五女の令成ちく。皆を に賊しふ。翁が馬市よ出
れはしを笑出して我ホ爾くせよとをしへ給ひしうば。はるく笑ことを
思ひあるら。やふ男の公彼ことを斯ちくはけと然も志れ。足して我
ろ紙の行をと終る。軍字屋のるをみ努疑ひ給ひそと痛嬢るよ成れ
皆太が勝よ靠ろとく。今い夜も文ゆり早う寝給へしといとがと

ゆり。長者此軍字屋といをきくに合せく。思ひ出れば仏春鈴して日
代と戯れ合られ女ゆりる。善太ハ名うての悪者るれば致るべきま
あらじ。扨も此女がひくはけさよ。海野屋よもかうんとハよも知り給ば。
痛怖しとそへて独言をれを笑付く。女周章て燈火をと吹消せ
ハ男もとくと立て尾りるるべれ氣ひるれば。長者ハそこが立退しが
如法暗夜のるなれが歩こうて有るとぞ。

月霄部物語巻二畢